

小池宏明牧師

*** 棕梠主日、受難週の始まり**

古河教会に赴任して最初の説教を、受難週の始めにさせていただいた。一体何を意味しているのだろうか思い巡らす。さらに、今、見えない敵(新型コロナウイルス)に苦しめられている私たちである。苦難の道を強いられている私たちであるが、苦しみで終わることはない。栄光に至る苦しみや困難なのだ。今回はイザヤ書 50 章から救い主イエス・キリストのお姿を仰ぎ見ていきたい。

*** 不信の民イスラエル**

預言者イザヤは、50 章の 1-3 節で、今にも滅ぼされそうな首都エルサレムに対して、「主なる神様は決して見放したのではないのだ！むしろ主がいくら呼びかけても、訪ねても、あなた方は応答しなかったのではないか！滅びに向かう原因は、あなた方の背きであり、あなた方の咎なのだ！」と訴える。

愚かな罪人は、いつの時代にも、主の御愛に鈍感で、主が、一生懸命語っても、その御ことばに応答することができない。主はいつも主の御声に素直に応答する「従順なるしもべ」を求めておられる。

*** 救い主イエス・キリストこそ従順なるしもべ**

4-9 節は、イザヤ自身の独白とも言えるが、イエス・キリストのお苦しみと重なっている箇所である。権威に満ちた神である主の言葉が、疲れた者を励まし、生きる力を与えて下さる。朝ごとに、父なる神の御ことばに、よく聞き従う「しもべ」の姿が見えてくる。特に、5、6 節では、積極的な無抵抗を示して、危害を加えられ、苦しめられても沈黙を守り通す、従順で、しかも、凜として退かない「しもべ」の姿が表わされている。主イエス・キリストのお姿をよく表現している、と見ることができる。

*** 共に労する神の家族、主にある兄弟姉妹を目指して**

そもそも苦しみを受けて十字架で死んだイエスを、主なる神、キリスト(救い主)と仰ぐ私たちのこの群れ、キリストの教会こそ、ユニークな集まりだ。この世の価値観とは反対である。この世は強い者、カッコいい者に注目して、あこがれて、神のように崇めている。しかし、主イエス様のお姿は、神であられる方なのに、この醜い世界に住んで下さり、罵られ、馬鹿にされて、衣をはぎ取られ、ムチ打たれ、裏切られ、ついに、十字架に付けられて血を流され、ボロボロになって死なれたのだ。

実は、このような主イエス・キリストの歩みこそ、私たち教会の希望であり慰めである。それは、主イエス・キリストを私の主、私の神、私の唯一の救い主と信仰を告白する群れである教会も、この世に嫌がられて、馬鹿にされて、皮肉を受けて、迫害をうけるからだ。受難の主が、私の主である、と告白することは、私もまた、受難を受ける道、苦しみの道を歩むことを意味する。主イエス様が父なる神様に従順であったように、私たちも主の御声に聴き、主に従って生きる道を選ぶようになる。

そういう意味で、私たちは、主に聴き従う同労者の群れになりたい。共に労苦する兄弟姉妹、神の家族になりたい。

今の時の困難さを共に担って、回復の希望、復活の希望に生きたい。